『失楽園』における再生と神の恩寵

杉本　誠

『失楽園』は，ホメロスの『イーリアス』『オデュッセイアー』およびウェルギリウスの『アエネーイス』のような古典叙事詩のコンヴェンションに基づいて書かれた叙事詩である。『失楽園』に古典叙事詩を凌駕する点がいくつかあるとすれば，その最たるものは，事の根源をうたっているという点である。ここでいう根源とは，天地と人間の創造，人間の堕罪と楽園の喪失のみならず，さらにさかのぼってルシファーの反逆と天上の戦い，そしてその原因となった神によるキリストの地位の高揚である。

『失楽園』が全人類に及ぶことの根源をうたおうとしているという意味は，第一巻冒頭にみられる。そこでは“first”と“beginning”が何度も繰り返される。冒頭の33行の中に“first”と“beginning”は両方で7回出てくる。この冒頭部分において，アダムとアキレウス，オデュッセウス，アエネーアース，そしてエデンの喪失とトロイアの喪失の間に暗喩的比較がなされている，と指摘されている。(1) 古典叙事詩のコンヴェンションを用い，内容的には古典叙事詩との比較をしながら，ミルトンは『失楽園』の主題がはるかにそれらを凌駕することを示している。まさにフライが指摘するように，『失楽園』の偉大さはその主題の偉大さにある。(2)

『失楽園』の各巻には，当然ながらそれぞれの機能と意味がある。全巻を通読してそれぞれの事件が起こった順序を読者が追い，整理することは可能である。即ち，それぞれを列挙してみると，神によるキリストの地位の宣言（第5巻），一部天使の反逆（第5巻），天上の戦い（第6巻），反逆天使が地獄に落とされる（第6巻），新世界の創造（第7巻），アダムとイヴの創造（第8巻），悪魔の誘惑，人間の堕罪（第9巻），悔い改め（第10巻），天使ミカエルによる預言（第11，12巻），アダムとイヴの追放（第12巻）となるであろう。

そこで小論では『失楽園』におけるアダムとイヴの堕罪後の再生の過程を検討しながら，そこにおいて神の恩寵が如何に人間に働きかけているかを整理してみることにする。

第9巻において，イヴは悪魔のことばにだまされ，禁断の実を食べる。イヴの堕罪を知った直後のアダムが口にすることばは，イヴへの非難よりも，要するに，自分はイヴなしでは生きて行けないということである。

How can I live without thee, how forgo

Thy sweet converse and love so dearly joined,
To live again in these wild woods forlorn ? (Ⅸ, 908—10)

お前なしでどうして生きていけよう。
固く結ばれたお前のやさしい語らいと愛を棄てて，
どうしてこの寂しい荒涼たる森の中で再び生きていけようか。

この点に固執してアダムは実を食べる。これはアダムの意志によることである。しかも「だまされないで」('not deceived' Ⅸ, 998) 堕罪するのである。これは「また，アダムは惑わされなかったが，女は惑わされてしまい，あやまちを犯しました」（テモテ第一の手紙２章14節）という聖書のことばと一致する。さらに，アウグスティヌスもこれを支持して，アダムはイヴとの絆を断ち切られることを拒否して，罪を犯したとしている。(3) アダムは神の律法に従うよりも，イヴと運命を共にする方を選び，実を食べる。いずれにせよ，二人はこうして堕罪する。堕罪後の二人が堕罪した状態に気づくまでに少し時間がかかる。二人は実を食べて罪を犯すことにより，初めてお互いにそれまでの夫婦間の愛情とは異なった欲情にかられる。「彼らは欲情に燃える」('in Lust they burne' Ⅸ, 105) と書いてある。しかし，不自然な肉欲はいつまでも燃えて，彼らの罪の状態をごまかせることはない。自分の取り返しのつかない罪の状態を知ったアダムは，実を食べるようにすすめたかどでイヴを責め，イヴはその朝ひとりで出かけるのを引きとめなかったとアダムを責めて第９巻が終わる（Ⅸ，1067—1185)。

二人が罪を犯すことにより，自然界の秩序も崩れ始める。酷暑や酷寒があらわれ，動物は互いに戦いを始める（Ⅹ，651—56，692—715)。こういう状態を目にし，さらに自分の内面のみじめさに気付いてアダムは嘆く。このアダムの嘆きは，第４巻において悪魔が自分のみじめな姿に気付いて口にする嘆きと類似している。

第10巻において，アダムが身を嘆く以前に，すでにキリストは天より降りてきて，二人にそれぞれ裁きを下し，毛皮の服を着せてやる（Ⅹ，216—17)。問題はアダムがいつ，どのようにこの意味に気付くかである。このときのアダムは第12巻の終わりで，イヴと共に楽園を追われて行くときのアダムとは異なることに注意したい。アダムは楽園を追われるときには，すでに天使ミカエルによっていろいろなことを教えられている。旧新約聖書に基づく人類の歴史を示され，キリストの贖罪により人類が救われ，ついに新しい天と新しい地が与えられるという希望をもって楽園を出て行くのである。楽園を追われることは悲しいには相違ないが，前途には希望がある。それを知ったとき，アダムは第12巻で次のように言っている。

O goodness infinite, goodness immense !

That all this good of evil shall produce,
And evil turn to good;　(XII, 469—71)

おお無限の愛，測りがたき義よ。
この善をすべて悪より生み
悪を善に変えるとは。

悪より善を生んでいく神の愛と赦しの力を知ったときのアダムの感激である。

しかし，第10巻で嘆くアダムは，まだこの神の力を知らない。彼はなおも，イヴへの激しい非難のことば（X，867—908）において，彼女を責めようとする。その中で彼は「お前さえいなかったら，私は幸せであったのに」('But for thee I had persisted happy,' X，873—74）と言って，イヴの存在を呪い，遂には女性を創造した神のわざを冒瀆するところにまで至っている。だが，アダムの再生への可能性を現実のものに変えるきっかけとなるのは，アダムの侮辱と憎しみのことばに答える「アダム，私をそのように見捨てないで下さい」('Forsake me not thus, Adam,') で始まるイヴの嘆願（X，914—36）である。これは，ジョセフ・サマーズも言うように，『失楽園』の転換点である。(4) この転換点を作り出すのは，激しく醜い感情から立ち直ったイヴの真実な人間愛である。

. . . witness heaven
What love sincere, and reverence in my heart
I bear thee, and unweeting have offended,
Unhappily deceived . . .　(X，914—17)

天も御照覧下さい。
私があなたに対して，どれほど真実な愛と尊敬の思いを心に
抱いていることでしょう。そしてまた，私が知らぬ間に，
不幸にもだまされて罪を犯してしまいましたことを。

自責の念にかられているイヴがアダムに対して抱くこの愛が，アダムの中にあわれみと愛の気持ちを生じさせ，これがアダムの罪の状態からの回復の最初の力となる。

ここではまだ，イヴの意識の中には，神への従順こそ真実な愛を可能にするものであるという理解は十分回復されてはいない。しかし，ここには夫であるアダムへの妻としての従順がある。そしてそのことによって，二人の間に男女の創造の秩序が取り戻される。その意味において，こ

のあとの回復の過程で主導的な役割を果たすのはアダムである。彼は，イヴが自分ひとり罰を受けたいと願うその懇願を斥けるばかりではない。イヴの自殺や避妊の提案を正しい判断によって思いとどまらせ，またイヴの子孫が蛇の頭を砕くという，宣告の一部をイヴに思い起こさせるのはアダムである。そして，二人で死を選ぼうと提案するイヴをたしなめるほど冷静さを取り戻す。さらに，アダムは自分たちの罪に対する裁きのことばを思い出し，それに従おうと言う。自分の非を素直に認めた謙虚なアダムは，むしろイヴの提案の中に神の意志にそぐわない強引さを認め，これをたしなめるのである。この秩序の回復によって，初めて彼らは神の前にへりくだって赦しを乞い，神との和解を願うことができる状態になる。アダムが先に立って二人は裁きの場に急ぎ，神の前に悔い改めて祈る。

イヴのへりくだった姿によって心を動かされ，神の裁きに従おうとするアダムは，神の裁きそのものが予期に反して如何に寛容であったかに気付き始める。これがアダムとイヴの再生の始まりである。ティリヤードはこの堕落した二人の再生の過程が，第10巻の初めにおいて，キリストが二人に裁きを下すと同時に，二人をあわれんで衣を着せてやるところで，すでに始まることを指摘している。(5) たしかにキリストのこのあわれみがなければ，堕落した二人は再生に向かうことはできない。しかし，まだキリストによる贖罪を知らない人間が，自分なりの努力でお互いに和解し，そこから二人で神に赦しを乞う気持ちになっている点にも注意をしたいと思う。

アダムとイヴの和解は，『失楽園』の真のクライマックスであるとティリヤードが言うほど，それは美しいものであるが，もちろん，二人が和解しただけでは，彼らの愛は在るべき状態に回復したとは言えない。いったん堕落した人間の愛は，それが或る瞬間にどれほど真実で美しいものであっても，神から離れている限り，直ちに情熱に支配され，彼らの愛が相互の非難と憎しみに変わることは，彼らが経験によって学んだところである。人間を超える，より大きな力が彼らに働かなければ，もっと正確に言えば，より大きな力が彼らに働いていることを知り，それに彼らが応えるのでなければ，堕ちた人間は同じことを無限に繰り返して，そこから回復する望みを持つことはできないであろう。つまり，神への従順を抜きにした人間の愛は，必ず破綻をきたすということである。要するに，堕落によって暗くなった人間の心は善を抱くことができない。人間は自らの意志によって悪を選び，生得の知識の多くを失った上に，心も暗くなった以上，自らの力で己れの心を以前と同じく明るくすることはできないのである。それゆえに神は，人がその自由意志をもって罪の状態から立ち直り，神と人への愛を回復することができるように，神の恩寵が人に働きかける。ここに最初の創造よりも偉大な再創造が行なわれるのである。

アダムが「神の先行する恩寵」(Prevenient grace XI, 3) の力によって祈る場面は，第10巻の終わりで，次のように描写される。

What better can we do, than to the place

Repairing where he judged us, prostrate fall
Before him reverent, and there confess
Humbly our faults, and pardon beg, with tears
Watering the ground, and with our sighs the air
Frequenting, sent from hearts contrite, in sign
Of sorrow unfeigned, and humiliation meek.　(X, 1086—92)

われわれにできる最善のことと言えば,
神がわれわれを裁かれたところへ戻り,
うやうやしく神の御前にひれ伏し，そこで謙虚に
自らの罪を告白して赦しを乞い，偽りのない
悔悛と柔和な謙遜のしるしに,
悔いた心から出る二人の涙で地面をうるおし,
二人の溜息で大気を満たすことではないだろうか。

アダムとイヴは直ちにこのことばを実行する（X，1098—104)。人におけるこのことばと行為の一致は，まさに恩寵によって可能とされた神のことばの実現にほかならない。

アダムの神の愛とあわれみについての理解の深まり，とりわけ，それらが神の裁きの中にこそ示されるという理解の深まりと共に，彼は真に再生された人間へと変わってゆく。それが上に引用した 'What better can we do . . . ' 以下のことば，及び，それに続く次のことばに見られる。

Undoubtedly he will relent and turn
From his displeasure; in whose look serene,
When angry most he seemed and most severe,
What else but favour, grace, and mercy shone ?　(X, 1093—96)

神は疑いもなく，御心をやわらげ，不機嫌を
なおされるだろう。神はどんなに激しく怒り,
厳しく見える時でさえも，その静かな御顔には,
ただ好意と恩寵とあわれみだけが輝いていたのではなかったか？

上述の，理解の深まりということは，'Undoubtedly' という，アダムの神に対する強い信頼の気持ちを表すことばを経て，最後の行において，一つのクライマックスに達するのである。

神への不従順を悔い改めたアダムとイヴの二人の内面の転換は，第11巻冒頭に表現される。

Prevenient grace descending had removed
The stony from their hearts, and made new flesh
Regenerate grow instead, . . . (XI, 3－5)

人間の悔い改めに神の先行する恩寵が降りて，
彼らの心から石のような頑(かたく)なさを取り除き，そのあとに
再生の新しい肉を植えつけられた . . .

ここでは「神の先行する恩寵」が擬人化されて上から下への運動として描かれる。そしてそれが人の心の「石」を取り除き，新しい「肉」の心を生じさせ，そこからさらに「霊」の祈りが翼をつけて飛翔して行く（XI，14)。そして「石」から「肉」の心へ，さらに「霊」への運動こそ，『失楽園』第11，12巻におけるテーマなのである。

ここに「再生の」('Regenerate') ということばが，作品全体で一度だけ出る。この「再生」という神学的概念に関して，『キリスト教教義論』の中で，ミルトンは次のように述べている。

人間を回生させようという神の意図は，その人に以前にもまして正しい判断力と自由意志を駆使する生まれながらの能力を回復させようとするばかりか，それは内なる人を新しいものとし，新しくされた人に神の力により新しい神的な能力を与えようとする。これが再生とか，キリストの接(つ)ぎ木とも呼ばれる過程なのである。(6)

つまり，再生の経験をもつ人間は，生まれながらの人間とは区別され，神にある新しい創造とされている。ミルトンはこの「再生」ということばを，『失楽園』においては，さきに引いた一箇所でしか用いていない。だが，この重要なことばの意味は，別のことばで繰り返し表現されている。たとえばこの作品の第11巻及び第12巻に出てくる「目」ということばである。天使ミカエルはアダムの目から「薄膜」(film) を取り除き，アダムが真なるものを見ることのできるように導く。彼はアダムの「真の開眼者」('true opener') なのである（第11巻412，423，429，598，711，863行。第12巻274行)。これは使徒パウロが復活のキリストに会ったときに，彼の目から「うろこのようなものが落ちて，目が見えるようになった」（使徒の働き９章18節）と告白する，あの体験に相応する。アダムの場合，神の霊に会った結果，肉的視力を越える霊的眼力を与えられる経験を言うのである。「目が開く」ということは，「再生」の体験を言い表している文学的な表現である。こう考えてくると，『失楽園』第11巻と12巻のアダムとイヴは，この段階で「再生」を

体験しており，神から二人のところに遣わされた天使ミカエルによる未来史の啓示は，「知識」('knowledge') から「確信」('persuation') に至るアダムの再生の過程のドラマ化であり，再生の深化と言うことができよう。その意味で，ファウラーが言うように，第11巻及び12巻を，「信仰」(faith) の段階を扱うものと解釈したい。(7)

では，「悔い改め」から「信仰」の段階へ向かう場面はどこに見られるであろうか。それは，まず第11巻初めで，アダムとイヴの祈りが終わったあと，ミカエルが到着する前に二人が交わす対話においてである。アダムは言う。

> . . . persuation in me grew
> That I was heard with favour, peace returned
> Home to my breast, and to my memory
> His promise, that they seed shall bruise our foe;
> Which then not minded in dismay, yet now
> Assures me that the bitterness of death
> Is past, and we shall live.　(XI, 152—58)

> 自分の祈りが好意をもって聞き入れられたという確信が，
> わたしには生じてきた。私の胸に平和が戻り，
> お前の子孫がわれわれの敵を打ち砕くという，
> 神の約束を憶い出したのだ。あの時は苦悩のあまり，
> これを心にとどめはしなかったのだが，今では
> 死の苦しみは去った。われわれは生きてゆくのだという
> 確信をわたしに与えてくれる。

これより前，第10巻のアダムのことば（1029—35）の中では，女の子孫が蛇の頭を砕くという神のことばは，裁きの「宣告」('sentence') の一部として受け取られていた。アダムは，この「先行する恩寵」の主題を，ここで持ち出すのであるが，これを今，彼は神の「約束」('promise') として理解するのである。このことばの変化は重要である。これは明らかに，アダムが再生の過程でそれだけ進んでいることを示す。「宣告」と「約束」の隔たりは，決して小さいものではない。キリスト教信仰や教義において，「約束」ということばが大きな意味を持つことは，ここに述べるまでもないであろう。そればかりでなく，その約束は自分たちが生きることをも保証するものであることをアダムは理解するに至っている。それを受けて語るイヴも，その理解においては次の引用に見られるとおり，アダムと全く同じである。

But infinite in pardon was my judge,
That I who first brought death on all, am graced
The source of life. (XI, 167—69)

万物に初めて死をもたらしたわたしが
生命の源となる栄光に恵まれるとは,
あの審判者が赦しにおいても無限であられるのです。

「宣告」から「約束」への変化,「死すべき者」から「生きる者」への変化は,同時に,神が「怒れる神」('offended Deity' XI, 149) から,「やさしき」('placable and mild' XI, 151) 神に変わることである。

「悔い改め」から「信仰」への発展は,この二人の変化のあとを受けて,それをさらに押し進める形で,彼らの罪からの回復のために語るミカエルの最初のことばにも見ることができる。

Sufficient that thy prayers heard, and Death,
Then due by sentence when thou didst transgress,
Defeated of his seizure many days
Given thee of grace, wherein thou mayst repent,
And one bad act with many deeds well done
Mayst cover. (XI, 252—57)

お前の祈りは聞かれた。そして,お前が罪を犯した時,
宣告によって下されるはずであった死は,
恩寵によってお前に与えられるしばらくの期間,
その力を奪われ,その間お前は悔い改め,
多くのよき行ないをもって,一つの悪しき行為を
償うことができるのだ。

アダムは,犯した罪のために直ちに死すべきものでありながら,「恩寵」によって,多くの日々を生きることを赦される,という。そしてまた,彼は生きている間,悔い改めなければならない。それと同時に,犯した罪を信仰の行ないによって償わなければならない,という。信仰の行ないは,ミカエルが最後の訓戒 (XII, 575—87) の中で強くすすめるように,確信の段階に達して初めて可能となるものである。言い換えれば,それは最終的な「救いの信仰」('saving faith') の段

階に属するものである。「多くのよき行ない」とは，この一節が言及しているペテロ第一の手紙４章８節に「愛は多くの罪をおおうからです」と述べられている，その愛である。人の罪が赦されるために，神がミカエルを通して人に求めるのは，生涯にわたって罪を悔い改め，そして愛を実践することである。

しかし，アダムはまだここでミカエルの言う「多くのよき行ない」が具体的にいかなるものを指すのか，そして神が自分を死より贖うということがどのような形で実現するかを知らない。このあと第11巻，12巻で，幻と物語りとによって，人間の未来の歴史，即ち，神による人の最終的な救いの計画を示された後に初めて，彼はそのことを知るのである。それは神の愛を示されることである。それは，キリストによる人の罪からの贖いであり，人はキリストのその愛を模範として神と人とを愛してゆく，ということである。

ミカエルによる教育（'instruction'）が完了し，アダムの回復のために必要な「正しい知識」が与えられたとき，彼はその回復の過程を「救いの信仰」の段階にまで至らせる。この段階に来て，ミカエルはアダムに対して「よき行ない」を行なうよう，明確に忠告する。

> . . . only add
> Deeds to thy knowledge answerable, add faith,
> Add virtue, patience, temperance, add love,
> By name to come called Charity, the soul
> Of all the rest.　　(XII, 581—85)

> ただ，
> お前の知識に相応わしい行ないを加えよ。信仰，
> 徳，忍耐，節制を加えよ。とりわけ，他のすべてのものの
> 魂である，聖愛の名で呼ばれることになる
> 愛を加えよ。

アダムが神より授かった自然界の知識に応じた徳の実践をミカエルは忠告する。堕落以前にあっては，人は楽園にあることがすべてであったが，今後，回復された聖い心の具体的な行為が人の存在をあらしめるのである。

ここで言う知識に行ないを加えるということは，決して行為によって義とされるということではない。ミルトンが『キリスト教教義論』で説くように，人は信仰によって義とされるのであるが，ただそれは，行ないを伴う「生きた信仰」('a living faith') でなくてはならないということである。(8) われわれはここで，行ないと信仰（そして，徳，忍耐，節制，愛）が並置され，共に，

知識に加えるべきものとされていることに注意しなければならない。

従って，信仰は，知識としての信仰に留まらず，それは「生きた信仰」，即ち，「信仰のわざ」('works of faith') にならなければならない，というのがミルトンの主張である。別の言い方をすれば，わざなしには，「生きた信仰」，「真の信仰」はあり得ない，ということである。(9) そして，そのような信仰に生きることを可能にさせるのは，神の聖霊 (Spirit) である，とミルトンは言う。(10) 従って，アダムは信仰者のうちに聖霊が具体的にどのように働くかを知らされ，そのことによって事実上，聖霊の恵みと導きを体験する者とならなければ，真に再生された人間になったことにはならない，と言えるのである。言い換えれば，アダムは聖霊の力によって「よきわざ」('good works') を行なうことのできる者とならなければならないのである。

ミルトンは，『キリスト教教義論』の 'Saving Faith' の章で，信仰とは，「神を受け入れ，神に近づくこと」('a receiving of God and an approach to God') である，と言っている。(11) そして，神を受け入れ，神に近づくためには，まず，神についての正しい知識がなければならない。そして信仰は，ここから始まって善へと向かうものである。その意味で，信仰の座は知性ではなくて意志である，と述べている。(12)

Henceforth I learn, that to obey is best,
And love with fear the only God, to walk
As in his presence, ever to observe
His providence, and on him sole depend,
Merciful over all works, (XII, 561—65)

今後は，従うことは最善であり，
唯一の神を恐れをもって愛し，
常にその御前にあるがごとくに歩み
絶えずその摂理を信じ，すべてのみわざに
恵みをたもう神にのみ依り頼み，

上に引用した箇所に見られる一連の動詞，'obey', 'walk', 'observe', 'depend' が表すものは，「神を受け入れ，神に近づく」以外の何ものでもない。ここに見られるのは，神に対する絶対的な服従と，信頼と，依存の姿勢である。しかも，この部分を導入する 'Henceforth I learn' ということばには，それまでと違った，静かではあるが強い決意の調子が感じられる。これは，ミカエルへの質問を続けている段階のアダムではない。ここで，アダムは別の人間に生まれ変わっている。再生された人間になったのである。これこそ信仰者の模範としての姿である。ミルトンは，『キ

リスト教教義論』の「再生」の章で，再生とは，神のことばと聖霊の力によって，古い人が滅ぼされ，内的人間が，知性においても，意志においても，生まれ変わらされることである，と述べていることに注意したい。(13) この箇所は，アダムが知性においてのみならず，意志においても生まれ変わったことを示すのである。従って，ティリヤードが，「再生の人間，即ち，その理性がキリストによって再び光を与えられた人間は，堕落以前の状態よりもすぐれた状態に達する」(14) と言ったのは，きわめて正しい解釈である。アダムの再生は，ここで完成する。彼のこの最後の応答こそ，知恵の頂点 (‘the sum of wisdom’) であるとミカエルは言う。知恵とは何か。ミルトンは『キリスト教教義論』の中で，知恵とは，われわれが神の御心を熱心に求めることである，と述べている。(15) 知恵とは，単に，神の救いのわざについて知識を得ることではない。「神を受け入れ，神に近づくこと」を学ぶことである。これは，神から与えられる恩寵に対して，信仰と愛をもって応答し，「よきわざ」に励むということである。再生とは，「人が新しい人間となり，肉体においても，魂においても，全く聖なるものとされ，神に仕え，よきわざを行なう者となることである」とミルトンは言う。(16)

堕罪した人間にとって最も必要な神のわざは，全知，全能でなく，恩寵である。恩寵を通して神を知り，そこから神の全知，全能に目覚めていくというのが順序である。ミカエルもアダムに対する預言の最後の部分で「これを学んだのでお前は最高の知恵を得たことになる。もうそれ以上の高い望みをいだいてはならない。たとえ，お前がすべての星の名と天使を知り，深淵の秘密のすべてと自然のわざのすべて，即ち，天，空，地，海における神のわざを知るとしても」(XII, 575—79) と言っている。堕罪前のアダムは神と語り，ラファエルに教えられたりして，神の力を理解していた。しかし，自分の罪を贖うほど神の恩寵が深いとわかったのは，堕罪して初めてのことである。ミカエルは神の機能のうち，恩寵と他のわざを区別して語っているのである。そして，恩寵を中心とした神の摂理に関する知識を，ミカエルは最高の知恵と言っている。

さて，アダムが行ないを伴う生きた信仰をもって神に仕え，よきわざを行なうために要請されるのは聖愛 (‘Charity’) の実践である。それは，いつ愛のないものに転落するかも知れない人間の愛ではない。聖愛の実践とは，情熱を超える神的愛をもって，神と人とを愛することができるように，力の限り努力することである。その意味で，聖愛は目標であり，また希望である。堕落した人間にどうしてそれが可能であろうか。それは，ミカエルによって啓示されたキリストの模範に倣うことによってである。神を愛することが，イヴを愛することであるような愛を回復する道は，それしかない。そして，大切なことは，そのことによってのみ，アダムは真に回復した人間になってゆくのである。

楽園を追放されるに際して，イヴは，アダムの側を離れない決心を述べる。

. . . but now lead on;

In me is no delay; with thee to go,
Is to stay here; without thee here to stay,
Is to go hence unwilling; thou to me
Art all things under heaven, all places thou,
Who for my wilful crime art banished hence. (XII, 614—19)

さあ，私をお連れ下さい。
私には，もはやためらいはありません。あなたと一緒に行くのなら，
ここに留まっているのも同然です。あなたなしでここに留まるのは，
心ならずもここから出てゆくのと同じです。
私の身勝手な罪のためにここを追われるあなたは，
私にとっては，天が下にあるすべてのもの，すべての場所です。

これは新たにされた愛である。ウィリアム・ハラーは，ここに引用した詩行について，イヴの新たにされた忠誠と服従の中に，人の贖いは予想されている，と述べている。(17) アダムとイヴは手を取り合って楽園から出てゆく。イヴのこの決心の表明と，彼らが再び手を取り合う行為に，「真の愛」の回復に向かう二人の固い決意が伺われる。彼らが既に知らされた神の愛と，キリストによる罪からの贖いとを信じて，それに正しく応えようと決意し，努力してゆくところに，神の聖なる定めの中にあるキリストの贖いが，既に彼らの現実であること，そして目標であり，希望である二人の「真の愛」が，事実上，回復されているのを見ることができるのである。

注

(1) Alastair Fowler, ed., with John Carey, *The Poems of John Milton* (London, 1968), p.458.
(2) Northrop Frye, *Anatomy of Criticism* (Princeton : Princeton University Press, 1973), p.320.
(3) St. Augustine, *The City of God against the Pagans* (Massachusetts : Harvard University Press, 1966), p.330.
(4) J. H. Summers, *The Muse's Method* (Chatto & Windus, 1962), p.183.
(5) E. M. W. Tillyard, *Studies in Milton* (Chatto & Windus, 1951), pp.13-14.
(6) Don M. Wolfe, gen. ed., *Complete Prose Works of John Milton*, Vol. VI (New Haven : Yale University Press, 1973), p.461.
(7) Fowler, *op. cit.*, p.998.
(8) *Christian Doctrine*, C. P. W., Vol. VI , p.490.
(9) *Ibid.*, p.490.
(10) *Ibid.*, p.492.
(11) *Ibid.*, p.475.

(12)　*Ibid.*, p.476.

(13)　*Ibid.*, p.461.

(14)　E. M. W. Tillyard, *Milton* (Chatto & Windus, 1966), p.272.

(15)　C. P. W., Vol. VI, p.476.

(16)　*Ibid.*, p.461.

(17)　Alan Rudrum, ed., *Milton : Modern Judgement* (Macmillan, 1969), p.311.